

(国語科)

## 自分の思いや考えをすすんで表現できる子どもを育てる ～書く力を育てる指導法の工夫を通して～

大阪市立九条北小学校 研修部

### 1. はじめに

本校では、昨年度より国語科を研究教科としている。「話すこと・聞くこと」の領域に焦点をあてた研究を行ってきた。その結果、自分の思いや考えを伝え合う時の「話し方」の基本である、声の大きさ、速さ、間の取り方などが身に付いてきた。そして、話型を使いながら、より聞き手を意識した話し方ができるようになってきた。しかし、言語力の向上については十分とは言えず、話し合いや発表の場面では、「説明の仕方が分からない」「自分の考えや思いをうまく表現できない」など、内容を論理的に組み立てて話すことを苦手とする児童の実態が見られた。相手に分かりやすく伝えられようにするためには、自分の考えをまとめたり、構成したりする「書く力」を高める必要があると考えた。

そこで、本年度は「書く力を育てる指導法の工夫を通して」として研究をすすめた。自分の考えが明確になるように構成を考えたり、相手や目的に応じて書くことがらを整理したりする力を育てるため、特に「書く」領域に焦点をあてた。事実を記録する、描写する、報告文、物語文などを読んだり書いたりする指導に力を入れ、書いたことを交流する場を設定し、自信をもって伝えることができるようにした。また、言語力を育てるためには、国語科だけでなく全ての教育活動を通して考えさせたり書かせたりする指導が一層必要となる。書くことを通して自分の考えや思いをすすんで表現する力を高め、さらに自分の考えを深めたり他の人の考えを認めたりすることができると考え、本主題を設定した。

### 2. 研究の内容

#### (1) 言語活動を充実させるための「書く」指導のあり方について

言語力を高めるためには、言語活動を単元のどの場面で、どのように位置付けるのが重要である。単元ごとに「書くこと」の指導事項を明確にし、指導法の工夫を行うことが児童の表現する力に結び付くと考えた。

まず、書くことに慣れる段階を通過させる必要がある。そのために、全学年で視写に取り組んだ。各学年に応じた文字数、時間設定を行い、朝学習や授業の導入で視写タイムを設けた。たくさん書くことで、「自分も書くことができる」と思わせることが重要である。書き慣れのために行った視写は、ノート指導との連結をさせるようにした。例えば、マスの使い方や句読点の打ち方である。

#### (2) 自分の思いや考えを表現するための学習形態や交流の場の設定

児童がすすんで交流を行えるようにするためには、「学習形態の工夫」「交流の場の工夫」が必要であると考えた。

「学習形態の工夫」では、学年の発達段階に応じて、ペアトークやグループでの話し合い、また、学級全体での意見交流、討論を授業の中に積極的に取り入れた。

「学習形態の工夫」「交流の場の工夫」どちらにも共通して重要なことは、自分の考えや思いを書くことができるということである。また、誰に伝えるのかという「相手意識」と何のために伝えるのかという「目的意識」をもって、考えや思いを書き表すことの大切さも意識させるようにした。

### (3) 言語環境の充実や教材・教具の工夫

言語力を高めるために、学校全体で教室や廊下などの言語環境の充実を図るための工夫を行った。言語環境を整えるという点では、掲示物「聞き方あいいうえお」「話し方かきくけこ」や「声のものさし」「ハンドサイン」などを教室に掲示して児童が意識できるようにした。特に、話し方・聞き方、話型の掲示物はノートに自分の考えをまとめる際のヒントになったり、発表するとき掲示を見ながら考えを言うことができるため、児童の負担軽減にもつながると考えた。

### (4) 基礎・基本の定着

「書く力」を育てるための基礎・基本の定着には、反復による習熟が必要である。そのための取り組みとして、前述した視写の取り組みの継続ということがあげられる。視写を行うことで、落ち着いて文字を書く習慣や文章の書き方を身に付けられるようにした。

### (5) 指導者の授業力向上の取り組み

児童の「書く力」を育てるためには、指導者自身が言語活動への意識を高め、理解を深めることが重要である。意識を高めるための取り組みとして、研究授業時のテーマとなる項目についての校内研修を実施した。また、研究討議会を活性化するためにワークショップ型の討議会を取り入れるようにした。

## 3. 研究のまとめ

### (1) 成果

- ・ 書き慣れのために取り組んだ視写タイムでは、児童自身が書いている証を残すことで目に見えた形で達成感をもたせることができた。自分は書くことができるという自信を、板書を写す力、ノートを自分でまとめる力にも結び付けることができた。
- ・ 指導者が「書くこと」の指導事項を明確にした上で、単元の構成を考え授業展開を工夫することができた。付けたい力に応じた言語活動の場を設定することにより、児童が「書くこと」をもとに自分の考えや思いを表現する活動につなげることができた。
- ・ 話し方・聞き方の約束や話型、話し合いのルールの定着に全学年で取り組み、教育活動全体を通して行うようにした。この取り組みを通して、意見を言うことや発表が苦手な児童も、自分の考えを伝えることの楽しさを味わうことができた。
- ・ ペアトークやグループでの話し合い、討論を取り入れた形態の授業を積極的に行った。そのことで、友だちの考えと自分の考えを比較しながら聞き、自分の意見を明確にした上で、意見交流を行う児童が増えた。
- ・ 「話し方」「ハンドサイン」などの掲示を全学年で行い、言語環境の充実を図った。その結果、掲示物をヒントに自分の考えをノートにまとめたり、意見や考えを発表したりすることができた。

### (2) 課題

- ・ 指導者側が児童に対して、「書く」ことの到達目標を明確に示した上で取り組ませる必要がある。そのことが、より児童の書く自信となり、目的をもって自分の意見を伝えようとする表現力にもつながると考える。
- ・ 依然として、児童にとって「書く力」にばらつきが見られる。全教科で行うノート指導を中心に、直写や視写の継続した取り組みを行うと共に、年間を通して行う系統立てた取り組みが必要である。